


判員モノ」と言えるものではなかった。そんな状況下、なぜか今、香港を代表する「法廷モノ」、しかも「裁判員モノ」の名作が登場！

『正義廻廊』という大層な原題がつけられた本作だが、英題の『The Sparring Partner』とは一体ナニ？それがよくわからない。しかし、本作が2013年3月に香港・大角咀（タイコックチョイ）で実際に起きた「両親殺害バラバラ事件」を映画化したもので、「あなたも、この裁判の“陪審員”となる。」とのチラシの見出しを見ると、こりや必見！しかも、本作は香港国際映画祭最優秀男優賞、香港電影金像獎（香港アカデミー賞）新人監督賞・編集賞受賞他13部門ノミネート、香港R-18歴代興収No.1とのことだから、その点でも必見！

■香港・大角咀両親殺害バラバラ事件とは？■

本作のパンフレットには、「香港・大角咀両親殺害バラバラ事件」について見開き1頁にわたる詳しい解説があるので、それを転記しておきたい。



タイコックチョイ
香港・大角咀両親殺害バラバラ事件
(現地報道では、大角咀肢解父母案／大角咀碎屍案／逆子弑親案など)

発生：2013年3月1日(香港・大角咀)

2013年3月、香港・大角咀の海興大厦(現・利奧坊・巖岸)において、当時29歳の香港人男性・周凱亮(映画のヘンリー)が、自宅で父親(65歳)と母親(62歳)を殺害。その後、友人の謝耀麒(当時35歳／映画のアンガス)とともに遺体を損壊・遺棄した。事件は極めて残虐性が高く、香港社会に大きな衝撃を与え、連日メディアで大きく報道された。

事件の発覚と捜査

殺害後、周凱亮は両親を探すためと称し、Facebookに「失蹤的爸爸媽媽(失踪した父母)」というページを開発。警察にも「両親が中国本土へ旅行に行ったまま行方不明」と届け出ていた。しかし2013年3月15日、警察が大角咀角祥街で遺体の一部を発見。捜査の結果、行方不明とされていた両親のものであることが判明し、周凱亮と謝耀麒は逮捕された。その後、冷凍庫内から頭部も発見され、事件の全容が明らかになっていく。

被告人・周凱亮(映画のヘンリー)の背景

幼少期から内向的で孤立しがちで、学業不振や海外留学中の差別・いじめ、職を転々とした経歴などが報告されている。知人の証言によれば、感情の起伏が激しく、他者と深い関係を築くことが難しかったという。精神鑑定では躁うつ病および強迫性障害の可能性が指摘されたが、知能指数(IQ)は126と高く、裁判では「他人を操作する能力が高い」とも評価された。

被告人・謝臻麒(映画のアンガス)の背景

温和な性格。過去に金銭トラブルや自殺未遂を経験。脳に後遺症が残り、認知機能が低下していたとされる。IQは84と平均を下回っており、捜査手法の妥当性が後に問題視された。

裁判と判決:2015年3月判決言い渡し

(周凱亮:殺人罪で有罪/謝臻麒:殺人罪は無罪)

裁判は2014年に開始されたが、陪審員が精神的負担を理由に相次いで辞退し、一度陪審団は解散。

2015年2月に改めて審理が行われた。2015年3月、陪審団は、周凱亮は「殺人罪で有罪(終身刑)」、謝臻麒は「殺人罪は無罪」だが、「遺体の合法的埋葬を妨害した罪」で懲役1年(すでに勾留期間が刑期を超えていたため即日釈放)という評決を下した。裁判官は判決を言い渡す際、周凱亮を「極めて危険で、演技性が高い人物」と厳しく非難した。

警察捜査と報道をめぐる問題

判決では、警察が謝臻麒に対して長時間の取り調べを行った点についても強く批判された。低い認知能力を持つ人物に対し、「41時間の拘束」「合計17時間以上の連続捜査を行ったこと」は「不公平で受け入れがたい」と指摘されている。

また事件報道をめぐる、香港の一部メディアが裁判前に、勾留中の被告人に取材を行い、記事を掲載したことが「裁判への影響(法廷侮辱)」として問題視され、新聞社および編集責任者に高額な罰金が科された。



付記

娼婦殺害計画:映画に登場する深圳で娼婦を殺す計画は、実際に周凱亮が証言したと報道されている。「周は、いわゆる“深圳計画”を謝(映画ではアンガス)が提案したと証言。深圳に戻って部屋を借り、娼婦を部屋に誘い込んで監禁・強姦・殺害するという計画で、両親殺害はその“予行演習”にすぎなかった、という内容だった」

<https://hk.news.yahoo.com/警誠稱疑親是預演-謀深圳姦殺妓女-215516657.html>

ヒトラーへの心酔:ネット掲示板によると、周凱亮はヒトラーについて書き込んでいたという。ただニュースなどで報じられている形跡はなく、真偽は分からない。周凱亮が書き込んだとされる発言は次の通り。「ときどきヒトラーの映像を見る。ベルリン陥落後にシアン化物のカプセルを飲んで自殺する場面を見ると、心の中に同じような考えが芽生えることがある。だが、もし本当にその決断をするなら、死ぬ前に、これまでの人生で最も憎んできた何人かを道連れにするつもりだ」

■ 2人の主人公は? 監督の問題意識は? ■

本作の一方の主人公は、「ヒトラーへの心酔」ぶりがやけに目につくものの、知能指数(IQ)が126と非常に高い男・張頌宗(ヘンリー・チョン)(楊偉倫/ヨン・ワイロン)。もう一方の主人公は、ヘンリーの「スパーリング・パートナー」を務めるものの、ヘンリーとは逆に知能指数(IQ)が84と平均を下回っている男・唐文奇(アンガス・トン)(麥沛東/マク・ピイトン)だ。そんな2人は、なぜヘンリーの両親を殺害するについて、「スパーリング・パートナー」に? また、2人の共犯者(?)の力関係は?

初の長編監督作品となる本作で高い評価を受け、香港電影金像獎（香港アカデミー賞）新人監督賞等を受賞した1987年生まれの何爵天（ホー・チョクティン）監督が、なぜ2013年に実際に起きた香港・大角咀両親殺害バラバラ事件に注目し、本作を監督するに至ったのかについては、パンフレットに収録されている「監督インタビュー」が興味深い。日本ではすでに「法廷モノ」「裁判員モノ」の名作がたくさん作られているが、今ドキの香港でここまで深く「法廷モノ」「裁判員モノ」に切り込んだ何爵天監督の姿勢は異例だから、この「監督インタビュー」は必読だ。

ちなみに、本作は香港では一部の残酷描写でⅢ級片（R18）となったが、大ヒットし、香港 R18+映画史上、歴代 No. 1 興収という快挙を達成しているらしい（日本のレーティングは R15）。それは、本作冒頭の警察官がアンガスの部屋に入り込むシークエンスを見ればよくわかるので、本作の鑑賞については“それなりの覚悟”を持って臨みたい。

■□■香港の法廷では、今でもウィッグとガウンを！■□■

日本で裁判員裁判が施行されたのは2009年5月。その啓蒙のために製作されたのが『裁判員—決めるのはあなた』（03年）（『シネマ3』330頁）だ。また、実際に起きた痴漢事件をネタに、周防正行監督が映画化したのが『それでもボクはやってない』（06年）（『シネマ14』74頁）だ。私はその両作で日本の裁判員制度について私なりの視点で詳しく評論したが、本作ではチラシに載っている弁護人や検察官のウィッグ（かつら）とガウン（法服）にビックリ！香港の法廷では今でもこんなウィッグ（かつら）とガウン（法服）を！多くの日本人はまずそのことに驚くはずだ。

私が弁護士登録した1974年当時は、戦後日本の司法制度が「法曹一元」の理想（理念）の下で構築されてきたことを知るとともに、2年後に裁判官、検察官、弁護士へと進路が分かれる500名弱の司法修習生が2年間同じ釜の飯を食いながら勉強するシステムの素晴らしさを実感していた。しかし、本作を見ると、香港の司法制度の根幹となっているのがイギリス式の法制度、すなわちコモン・ロー制度であることがよくわかる。そのため、①弁護士もソリシター（事務弁護士）とバリスター（法廷弁護士）という2つの職域に分かれると共に、法廷ではウィッグ（かつら）とガウン（法服）を着用しているが、その当否は？

本作のパフレットには、香港法廷弁護士、ニューヨーク州弁護士たる Jason Cheung／張皓程（ジェイソン・チョウ）による「香港司法制度、ここが気になる！」があるので、本作の鑑賞のためには、これをしっかり読み込みたい。しかし、今ドキこんな制度の当否は？

■□■なぜアンガスがヘンリーの両親殺害の共犯に？■□■

パンフレットの「香港・大角咀両親殺害バラバラ事件」で解説されているとおり、ヘンリーの両親の死体は大角咀（タイコックチョイ）にあるアンガスが住んでいる部屋から発見されたが、それは一体なぜ？ヘンリーとアンガスが共犯になってヘンリーの両親を殺害するシーンはスクリーン上に何度も登場するが、それが真実であるか否かは、本作のもう一方の主演ともいえる葉慧萍（イップ・ワイペン）（葉蘊儀／グロリア・イップ）や鄭家雯（チェン・カーマン）（鍾雪瑩／シヨン・シュッイン）等9人の陪審員はもとより、観客に

も全くわからない。とりわけ、事前の2人の打ち合わせが、「距離が近い方を刺す」であったにもかかわらず、アンガスがヘンリーの足を刺してしまうというハプニングはなぜ発生したの？何爵天監督の演出による「香港・大角咀両親殺害バラバラ事件」の陪審員と観客への見せ方は、本作が監督長編デビュー作とは思えないほどスリリングで洗練されているので、それに注目！

中でも数人の証人尋問をメインとする審理が進むにつれて際立っていくのが、IQの高いヘンリーの持って生まれた(?)変質狂的性格と冷酷さ、そしてIQの低いアンガスの責任能力の有無という問題だ。ヘンリーの弁護士は呉冠峰(ウィルソン・ン)(林海峰/ジャン・ラム)、アンガスの弁護士は遊嘉莉(キャリー・ヤウ)(蘇玉華/ルイーザ・ソウ)。この両人は被告人の利益のためのそれなりの弁護活動を尽くしているようだが、その熱意の程は正直、私にはよくわからない。他方、私が弁護士歴52年の弁護士として思うのは、本作は明らかに2人の被告人の利害が相反すること。したがって、2人の被告人が同じ法廷で同時に審理するのは不適切！別々の法廷で審理すべきでは？ということだが、本作にその視点が全くなかったのは、私には少し残念だ。

それはともかく、香港初の本格的「法廷モノ」「裁判員モノ」たる本作の法廷シーンは十分な迫力があり、じっくり鑑賞するに値するものになっているので、私は本作を強くロースクールや司法研修所の教材として推薦したい。

■□■9人の陪審員の評議風景に注目！こりゃ面白い！■□■

陪審員映画の名作中の名作であるハリウッド版『十二人の怒れる男』(57年)の陪審員は12名、日本発の裁判員映画の名作『12人の優しい日本人』も『それでもボクはやってない』も、裁判員は12名だ。しかし、本作にみる香港の法廷の陪審員は9名だから、まずはその違いに注目！次に、本作にみる、裁判開始と同時に実施される9名の陪審員の選出手続きも興味深いので、それもじっくり確認したい。

本作が香港初の本格的「裁判モノ」「陪審員モノ」の名作になっている所以は、後半から展開される証拠調べが全て終了した後、評議に入った9名の陪審員たちが見せる評議風景にある。ハリウッド版『十二人の怒れる男』では、早くナイター観戦に行きたい陪審員の一人が「さっさとケリをつけようぜ」と申し出たにもかかわらず、陪審員8番だけが無罪の票を投じ、「みんなの意見を出し合おう」と言い始めたところから本格的な陪審評議に入っていたが、さて本作は？

陪審員は抽選によって選ばれるもの、そして、辞退は可能だが他方で陪審の義務が強調されているから、選出されると陪審員を受けるべきかどうかについて悩むのは当然だ。そんなシステムで偶然構成される9名の素人集団が、缶詰状態の中、法廷での審理の一部始終を聞き、有罪か無罪かを決めることなどホントにできるの？またそれが現時点で考えられる人類のベストの知恵なの？そんな疑問が噴出するのは当然だが、さあ本作にみる個人的な9名の陪審員たちの陪審評議の展開は如何に？またその結論は如何に？

■□■心証形成上ヘンリーは損？アンガスは得？しかし・・・■□■

安倍晋三元首相を銃撃殺害した被告人山上徹也の審理を裁判員裁判で実施した奈良地方裁判所は、2026年1/21無期懲役の有罪判決を下し、被告人は現在控訴中だ。同裁判では、

被告人の生い立ちとそれを考慮した減刑の可否が焦点とされた。

しかし、本作はもっと複雑で、ヘンリーについては両親殺害に至る動機形成そのものの説明が不可欠だし、アンガスについては知能指数 (IQ) が 84 と低いと責任能力があったのかかが問題にされることに。スクリーン上で展開していく本件の審理を見ていると、一方では知能指数 (IQ) の高いヘンリーの性根の悪さ (?) が如実に現れるのに対し、知能指数 (IQ) の低いアンガスの泣き叫ぶ姿が顕著だから、その対比が際立っている。そんな法廷風景を見ていると、誰がどう見ても心証形成上ヘンリーは損、アンガスは得！このままいけば、ヘンリーは極悪非道の凶悪殺人の計画者兼実行者となり、アンガスはそれに乗せられただけの可哀そうな道具、という構図 (認定) になってしまいそうだ。そう思っていると、案の定・・・。

ヘンリーについての「殺人罪で有罪 (終身刑)」は予想されたとおりが、アンガスの殺人罪は無罪とされ、「遺体の合法的埋葬を妨害した罪」で懲役 1 年 (すでに勾留期間が刑期を超えていたため即日釈放) とされたが、そんな結論は妥当なの？それらについて、私は必ずしも疑問なしとしないが、もしあなたが本件の裁判員だったら、あなたは同じ結論に？それとも・・・？

■□■香港映画はどこへ？日本のコラムは必読！■□■

私がずっと観たいと思いながら観ることができなかった最近の香港映画が、一方では香港民主化デモのドキュメンタリー映画たる『時代革命』(21 年) と『十年 (Ten Years)』(15 年) であり、他方では『トワイライト・ウォーリアーズ 決戦！九龍城砦』(24 年) だった。かつての香港映画は、ジャッキー・チェンが世界的注目を集め、『インファナル・アフェア』シリーズの人気も沸騰した。しかし、2018 年に香港国家安全維持法が制定されると・・・。それ以上は書かない (書けない) が、そんな時代状況下、香港映画は死んでしまったの？そんな心配が表面化しつつある中で登場したのが『トワイライト・ウォーリアーズ 決戦！九龍城砦』であり、本作だ。(1)

しかして、本作のパンフレットには、①くれい響氏 (映画評論家) の『「香港映画が生き残るための新たな術」となった『正義廻廊』』、②徐昊辰氏 (上海国際映画祭プログラマー / ロッテルダム国際映画祭プログラマー / 活弁シネマ倶楽部) の「変化の只中にある香港映画の現在地」という 2 本の「コラム」がある。これは香港映画の今後を考える上で、本作の鑑賞とともに必読！

2026 (令和 8) 年 3 月 6 日記